

掛保久防空壕

～下水道工事に係る緊急発掘調査報告～

Takeboku Bomb Shelter
-A Report of a Salvage Excavation Prior to Sewer Construction-

西原町教育委員会・沖縄県立埋蔵文化財センター
Nisihara-cho Board of Education / Okinawa Prefectural Archeological Center

ABSTRACT : Takeboku bomb shelter is a horizontal tunnel on the hillside, dug during WWII. The size of the tunnel is small so that it may have been designed for a single family. Some dining goods such as bowl, plate and iron pot were unearthed as well as one set of skeletal remains in the shelter. This shelter, located in Aza-Takeboku of Nisihara-cho, Okinawa prefecture, was discovered in November 14, 2005, in the course of the sewer construction. The excavation was carried out for the purpose of data recovery. This is a report of the excavation results.

目次と文章担当

1. はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	(山田浩久) 112
2. 調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・	(島袋智之) 112
1) 調査に至る経緯	
2) 調査体制	
3) 調査経過	
3. 位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・	(島袋智之・山田浩久) 113
1) 地理的環境	
2) 歴史的環境	
4. 西原町の沖縄戦と戦争遺跡・・・・・・・・	(伊波直樹) 116
1) 西原町の沖縄戦	
2) 西原町の戦争遺跡	
5. 遺構・・・・・・・・・・・・・・・・	(伊波直樹) 122
1) 立地と調査経過	
2) 形態的特徴	
3) 遺構内の様相	
6. 遺物・・・・・・・・・・・・・・・・	(山田浩久) 129
1) 染付 2) 沖縄産無釉陶器 3) 沖縄産施釉陶器 4) 本土産近現代磁器 5) 鉄製品	
6) 硯 7) 瓦 8) ガラス製品 9) セルロイド製品	
7. 人骨・・・・・・・・・・・・・・・・	(山田浩久) 132
8. 聞き取り調査・・・・・・・・・・・・・・・・	(伊波直樹) 135
1) 戦前の掛保久	
2) 今回調査した壕について	
9. まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・	(伊波直樹) 139

1. はじめに

本報告は掛保久防空壕の発掘調査成果をまとめたものである。平成17年度に西原町教育委員会が主体となり、沖縄県教育庁文化課・沖縄県立埋蔵文化財センターが協力をして実施した。発掘調査は平成17年11月15日～11月18日までの4日間行ない、資料整理は沖縄県立埋蔵文化財センターにおいて平成17・18年度に実施した。また、当該の壕に伴う聞き取り調査は西原町掛保久公民館にて平成18年度に実施した。

現地調査で得られた遺物・実測図・写真・画像デジタルデータ等の各種調査記録は沖縄県立埋蔵文化財センターにて保管しているが、本報告の刊行後は西原町教育委員会にて保管する予定である。

2. 調査に至る経緯

1) 調査に至る経緯

平成17年11月14日、掛保久の里道において下水道工事中に、西原町役場区画整理課の職員によって空洞が発見され、生涯学習課文化財係へ連絡が入った。

現場を確認すると中に遺物があり、工事担当職員と話をして遺物、遺構の確認することになった。11月15日、現場へ行き空洞の中に入る。すると、14日に確認した状況から明らかに遺物が動かされており、発見時のままでの調査は困難になったので、下地の確認のため土を取り除く作業をしていると、骨のようなものが出土した。県文化課に連絡して現場を確認してもらい、調査への協力の依頼をしたところ、県の指導の下、調査をすることになった。

2) 調査体制

発掘調査は沖縄県文化課及び沖縄県立埋蔵文化財センターの協力を得て西原町教育委員会が主体となり、平成17年11月15日(火)～11月18日(金)まで実施した。調査体制は以下のとおりである。

事業主体	西原町教育委員会	教育長	垣花 武信
事業事務	西原町教育委員会生涯学習課	課長	中山 博光
	〃	文化財係長	玉那覇 力
	〃	文化財係主事	島袋 智之
調査指導	沖縄県教育庁文化課	課長	千木良 芳範
	沖縄県立埋蔵文化財センター	調査課長	岸本 義彦
調査員	西原町教育委員会生涯学習課	文化財係主事	島袋 智之
	沖縄県教育庁文化課	専門員	中山 晋
	〃	〃	新垣 力
	沖縄県立埋蔵文化財センター	調査課嘱託員	伊波 直樹
	〃	〃	山田 浩久
聞き取り調査協力者		掛保久在住	玉城 善長
		掛保久自治会長	玉那覇 整
発掘調査協力者		掛保久在住	新川 幸信
資料整理協力者	沖縄県立埋蔵文化財センター	調査課	金城友香・光嶋香・仲村毅・ 中山まり・矢舟章浩

3) 調査経過

発掘調査は平成 17 年 11 月 15 日（火）より開始し、11 月 18 日（金）までの 4 日間で調査を行なった。掛保久の里道において、下水道工事のためバックホウにより地面を掘削中大きな空洞が確認されたそうである。空洞から中を覗くと、本土産近現代磁器が積むように置かれており、他に沖縄産無釉陶器等が散在していることから、防空壕の上部から開けたことがわかった。壕内は 2 人がやっと入れる位のスペースしかなく、内部が暗くて作業は困難であったが、近くに住む新川幸信氏の協力で、照明と土置き場を確保していただき、調査を開始した。

壕内は、成人男性が中腰でしか入れないほど狭いため、スコップがほとんど使用できず、地道に手鍬などで掘削し、バケツ等に土砂を入れ運びだした。壕本来の入口部分もある程度までは土砂を取り除くことができたが、天井からの崩落の恐れがあったため、確認するまでには至らなかった。

壕本来の入口にあたる部分以外の土砂を取り除くと、遺物と共に床部が現れ、床には縦長の板が敷かれているのが確認できた。この状況を図面と写真に記録した。記録した後にこれらの遺物・床板を取り上げたが、さらに床板の下から一条の溝が確認できた。この検出状況も同様に記録を行ない、調査を終了した。

発掘調査終了後、現場で記録した写真・図・遺物を沖縄県立埋蔵文化財センターに搬入し、資料整理を開始した。すでに平成 17 年度の資料整理計画が決まっており、年度内に報告することは難しかったため、平成 18 年度も引き続き資料整理と当該の壕に伴う聞き取り調査を実施し、年度末に執筆・編集を行なった。

3. 位置と環境

1) 地理的環境

西原町は、沖縄本島中部南端の東海岸側に位置し、その北端が北緯 26 度 15 分 12 秒、南端が北緯 26 度 12 分 24 秒、東端が東経 127 度 47 分 30 秒、西端が東経 127 度 44 分 6 秒である。東西約 5.8 キロ、南北約 5.1 キロで、面積が約 15.57 km^2 。北は中城村・宜野湾市と、西は浦添市・那覇市と、南は南風原町・与那原町と接し、東は中城湾に面する。

地形的には、低地部と丘陵部に大別される。低地部は、中央部で若干丘陵部に食い込んでいるが、大体町の東半分を占め、小波津川をはじめ数本の川が東へ流れているが、大きな河川はない。また、各川とも勾配は極めて小さく、したがって流れもゆったりしている。

掛保久・小那覇集落の東には旧日本軍の飛行場があった。さらにその東側の海岸には、昭和 40 年代に公有水面の埋め立てによってできた土地がおおよそ 666,027 m^2 （南西石油株式会社敷地部分）あり、さらにその南側隣接海岸部分には平成 8 年 4 月以降着工（マリンタウンプロジェクト＝MTP）された約 124 ha（西原町部分は約 60 ha）におおよぶ広大な埋め立て地がある。

丘陵部は、ほぼ町の西半分を占め、シルト質泥岩や砂岩を主とする新第三紀島尻層群が広く分布し、その岩質から盆状谷（丘陵地を刻んだ谷幅の広い浅い谷）の発達がみられ、その谷底には基盤岩の風化土壌（方言名・ジャーガル）が堆積している。丘陵地にある坂田小学校付近には、東流する川の流域と西流する川の流域との境界（分水嶺）が通っており、その最も低い標高はおおよそ 70 メートル程である。与那原町との境界をなす運玉森は、標高 158.1 m と高くない山ではあるが、山の形の美しいことで広く県民に知られている。また、去る沖縄戦では日米両軍の間で激しい攻防戦が行われた場所としても知られている。丘陵と低地の境界は急斜面地からなり、両者の境界は現地においても明確に区別できる。

町内では長期にわたる気象観測は実施されていないので詳細な気候状況は不明であるが、隣接する

那覇市において長期にわたる気象観測が行なわれている。本町より数キロ離れた場所での観測であるがその気候状況は、本町にもあてはまると考えられる。那覇市に所在する沖縄気象台が気象観測したデータをまとめたものがある。月平均気温が25度以上の月が6月から9月まで4ヶ月も続き、特に7・8月は28度を超えている。5月から9月までの相対湿度は79%以上もあり、夏はかなり蒸し暑いといえる。一方、最寒月である1月の平均気温は16.0度で、冬でも暖かいといえる。また、各月の平均風速をみると4.0 m以上あり、その結果、夏の蒸し暑さが幾分やわらぐが、冬は気温の割には冷たく感じられるようになる(1961年～1990年の平均値、風速は1975年～1986年平均)。

年平均降水量は2,000 mmを超えており、かなり多い。各月とも雨は多く降っており、最小雨月の2月でも100 mm以上ある。特に、梅雨期の5・6月と、台風の影響を受ける8月に多く降る。沖縄の降雨の特性としては、年平均降水量は多いが、年によるばらつきが大きい。降雨量は、5・6月の梅雨期、8月の台風期および10月上旬の秋雨前線南下の時期に集中し、しかもこれらの時期には豪雨が多い。また、雨域が狭いために観測記録に残りにくい雷雨やスコール性降雨も多い。さらに、沖縄の雨は雨滴が大きいこと、強雨型(6mm/10分以上)ほどより大きな雨滴が多くなるという(翁長1969)。

西原町内の植物分布をみると、丘陵地・低地ではヤブニッケイ・タブなど、丘陵地および斜面地ではリュウキュウマツ・オオバギ・アコウ・アカギ・ハマイヌビワ・ガジュマルなど、海岸付近にはイソフサギ・シマハママツナ・ハマササゲ・ゲンバイヒルガオ・クサトベラなど、人工改変地ではギンネム・タチアワユキセンダングサ・アフリカヒゲシバナなどが見られる。

集落の立地をみると、古い集落の大半が低地と丘陵の境界付近に立地しており、これらは水および耕作地の確保の上から有利な位置を選定した結果だと考えられる。町の中央部に位置する低地帯は、水田からサトウキビ畑へと変化はしているが、王府時代から現在まで常に本町における農業生産の中心地であることから理解できよう。一方、丘陵地にある上原集落は、気象面(霧が多発)や水の確保の面で古い集落に比較して条件的に厳しかったと推察される。上原集落付近の本格的な開発は、1970年代後半に琉球大学が移転してきて以降であり、1985年(昭和63年4月20日設計の概要の認可)に土地区画整理事業(上原棚原土地区画整理事業)が導入された後は、当該集落付近の開発が一層加速化された。町内には、北と南を結ぶ2本の幹線道路(国道329号線、県道29号線)と東と西を結ぶ2本の幹線道路(県道38号線、県道34号線)の計4つの主要幹線道路が通っている。北と南を結ぶのは、東側を通る国道329号線と西側を通る県道29号線である。国道沿いおよびその東側には事務所、工場および製油所など事業所が数多く立地しており、町内でも最も工業開発の進んだ地域である。県道29号線は、道路拡幅や歩道設置などの整備が行われた結果、那覇市周辺地域の都市化現象の顕在化もあって、近年その道路沿いの開発が急速に進んでおり、特に県道38号線との交差点付近(県立西原高校付近)の開発は急激である。また、県道宜野湾西原線の敷設により、県道29号線との交差する付近から上原・棚原・坂田地区あたりへの開発は、町内でも最も住宅等の建設が著しいところであり、上原・棚原土地区画整理事業の効果で都市的住環境のまちへ大きく変容している。

2) 歴史的環境

西原町は、古くは西原間切として広域に及んでいたとされる。「にし原」の意は北原とされ、広く中頭方面を指して称していたとされる。さらには南原に相対しての名称であったとともに、首里畿内の北境の一角を形成していた村であったと記録されている。特に首里周辺に近接して位置する真和志・南風原・西原の各地域は「古くは首里三平等と呼ばれた地域であった」とされている。

村落の構成においても、各時期において間切内への編入出の変遷をたどっており、「17世紀中期ごろには、津堅島・あめく村・めかる村・泊村」と実に現在の2市（那覇市・うるま市勝連）の一部までも広範囲に包括していたとされる。また、西原間切は、その広域を広く覆っている肥沃なジャーガル土地帯を有していたことから、早くから田畑の農業生産の地として位置づけられていたことがわかる。首里に隣接した地域の一つであることも起因していたと思われるが、早くから、首里王府の直轄領に組み込まれていたといわれている。このように西原という地域が古くから、よく知られた地域として、幾多にわたる歴史の流れの中に村落の変遷をたどっていった跡が分かる。

ところで、この西原地域に最初の人間活動の舞台として遺跡が形成されるのは古く、沖縄貝塚時代の前期後半の時期にまで遡りうる。表面踏査の段階ではあるが、現在の棚原集落の北東方に位置する棚原貝塚で確認することができる。しかし実質的に、この西原地域が広域的に有効的に利用されていくのは、やはりグスク時代へ入ってからで、西原平野に広がるジャーガル土地帯の開墾政策の始まりにもあるとされている。グスク遺跡として呼称されている中には、イシグスク、棚原グスク、幸地グスク、チキンタグスク等が存在する。現在までに確認されている遺跡の90%までが、歴史時代で中世～近世にかけて形成されたものである。小集落が点々と散在していたと考えられる。

また、西原町嘉手苅においては、第二尚氏の祖である尚円王の旧宅として知られる内間御殿の屋敷跡が存在する。東西の二殿（東江、西江）からなる。東江御殿はサンゴ石灰岩を素材として周囲を石垣で築いてある。東殿周辺からは、平瓦、丸瓦、軒平瓦、軒丸瓦など赤色瓦と灰青色瓦の二種類が採集されている。近世期の沖縄産瓦とされている。

古く沖縄の歴史の流れの中に、首里王府との関連で、西原一帯が強力に関与していた地域の一つであったことが、ここにおいても確認できる。内間之御殿由来記に関する記録として中山家文書の中に見ることができる。

4. 西原町の沖縄戦と戦争遺跡

1) 西原町の沖縄戦

1944 年（昭和 19）3 月、南西諸島を守備する大本営直轄の第 32 軍が創設された。当初、創設の主目的は「航空基地の建設」にあったが、同年 6 月米軍がサイパン島に上陸して以降、南西諸島にも米軍進攻の可能性が現実味を帯びてきたことから大本営は第 32 軍に地上戦闘部隊を編入し、南西諸島の防備を強化することを決定した。

当時の西原村には東部の小那覇から仲伊保に至る海岸平地に陸軍の沖縄東飛行場（西原飛行場）が同年 5 月から建設され、徴用労務者には地元西原村民がすでに沖縄中（嘉手納）や沖縄北（読谷）の飛行場工事に徴用されたため、島尻や離島の住民を徴用し工事にあたった。同年 9 月、第 32 軍の航空作戦準備のため飛行場設営の促進命令を発し、地上戦闘部隊の兵力を飛行場工事に投入して飛行場の完成をめざした。しかし、西原飛行場は強化の対象とされずに事実上放棄される状態に置かれた。飛行場用地一帯は地盤が軟弱なため、工事の先行きが困難視されたためといわれる。一方、地上戦闘部隊は 8 月中旬、第 62 師団歩兵第 63 旅団歩兵第 11 大隊約 1,200 名が西原国民学校や村内の各字に駐屯するようになった。

1944 年（昭和 19）10 月 10 日の米軍による南西諸島全域への空襲、いわゆる「十・十空襲」では西原村では兼久にあった製糖工場や西原飛行場などが爆撃された。「十・十空襲」以降、本島南部に駐屯していた第 9 師団が台湾へ移駐したことなどから、第 32 軍は作戦方針を戦略持久作戦へ転換し、それに伴い本島内の部隊配置も大幅に変更されることになった。そして、米軍の沖縄上陸が必至であると判断した軍司令部は、軍民あけて持久戦に備えるよう指示し、強固な陣地壕や待避壕を構築することを命令した。また、沖縄県庁をはじめ各警察署は重要書類の保管や戦闘中でも会議が開ける壕の構築を行うようになった。それに呼応して各市町村でも重要書類の保管を行うための役場壕を構築するようになり、西原村でも 1944 年（昭和 19）6 月から地元の人夫数名を雇って壕の掘削作業が行われた。

1945 年（昭和 20）4 月 1 日、米軍が本島中部西海岸に上陸して以降、首里に所在する第 32 軍司令部を目指す米軍とそれを阻止する旧日本軍との激しい戦闘が約 2 ヶ月に亘って中部地区で展開された。米軍上陸時、首里に程近い西原村では第 62 師団を中心とする各部隊が防衛陣地を形成していたが、米軍の攻勢を受け第 32 軍は 4 月 22 日、本島南部に配備していた第 24 師団を中部戦線へ投入する。第 24 師団は首里の東方を中心に西原村の運玉森、小波津、翁長、幸地にそれぞれ配備された。5 月 4 日、第 32 軍は総攻撃を行い、西原村の小波津、翁長、呉屋、棚原、幸地一帯では日米両軍の激しい戦闘が展開されるが、総攻撃は失敗に終わる。5 月 6 日、軍司令部は持久作戦に方針を転換し、現時点で保持している西原村では運玉森・桃原・幸地南方の高地を第一線とし、部隊の再配備を行った。米軍は首里に向けて徐々に南下し、特に運玉森では 5 月 25 日に米軍に占領されるまで激しい攻防が繰り返された。そして、5 月 27 日、第 32 軍司令部は首里を放棄し摩文仁への撤退を開始することとなった。

一方、西原村の住民は東海岸の集落民（小那覇、嘉手苅、兼久等）が本島北部へ避難したのを除き、それ以外の集落民は米軍上陸直後、村南部の池田ヘンサスクー帯に避難しており、首里、中城方面からの避難民も合わせて約 2 万人余いたといわれる。4 月 24 日、第 32 軍は戦況の悪化を受け首里周辺に避難していた非戦闘員（主に住民）に南部への移動を命じた。しかし、住民が南部への移動を始めたころは西原村一帯でも米軍の攻撃が集中し、多数の住民が犠牲となった。第 32 軍が首里を放棄し摩文仁へ撤退すると、西原村をはじめ中部地区の住民が多数避難した南部での戦闘に巻き込まれ、さらに多くの犠牲者を出すこととなった。

沖縄戦における西原村の住民の戦死率は約 63%に達し、中部地区の市町村では最も高い戦死率を数

える。その要因として、西原村は第32軍司令部が所在した首里に程近く、旧日本軍の防衛陣地が集中して構築されており、多数の兵が駐屯していた。住民は旧日本軍とともに行動するのが安全と考え、米軍上陸後も池田ヘンサスクなど村内の避難所に留まっていたが、軍からの南部への避難命令が出るころにはすでに北部への避難経路が絶たれていた状況であった。避難先の南部においても6月以降の南部掃討戦にも巻き込まれる形となり、犠牲者が続出する事態を避けられない状況があったと考えられる。

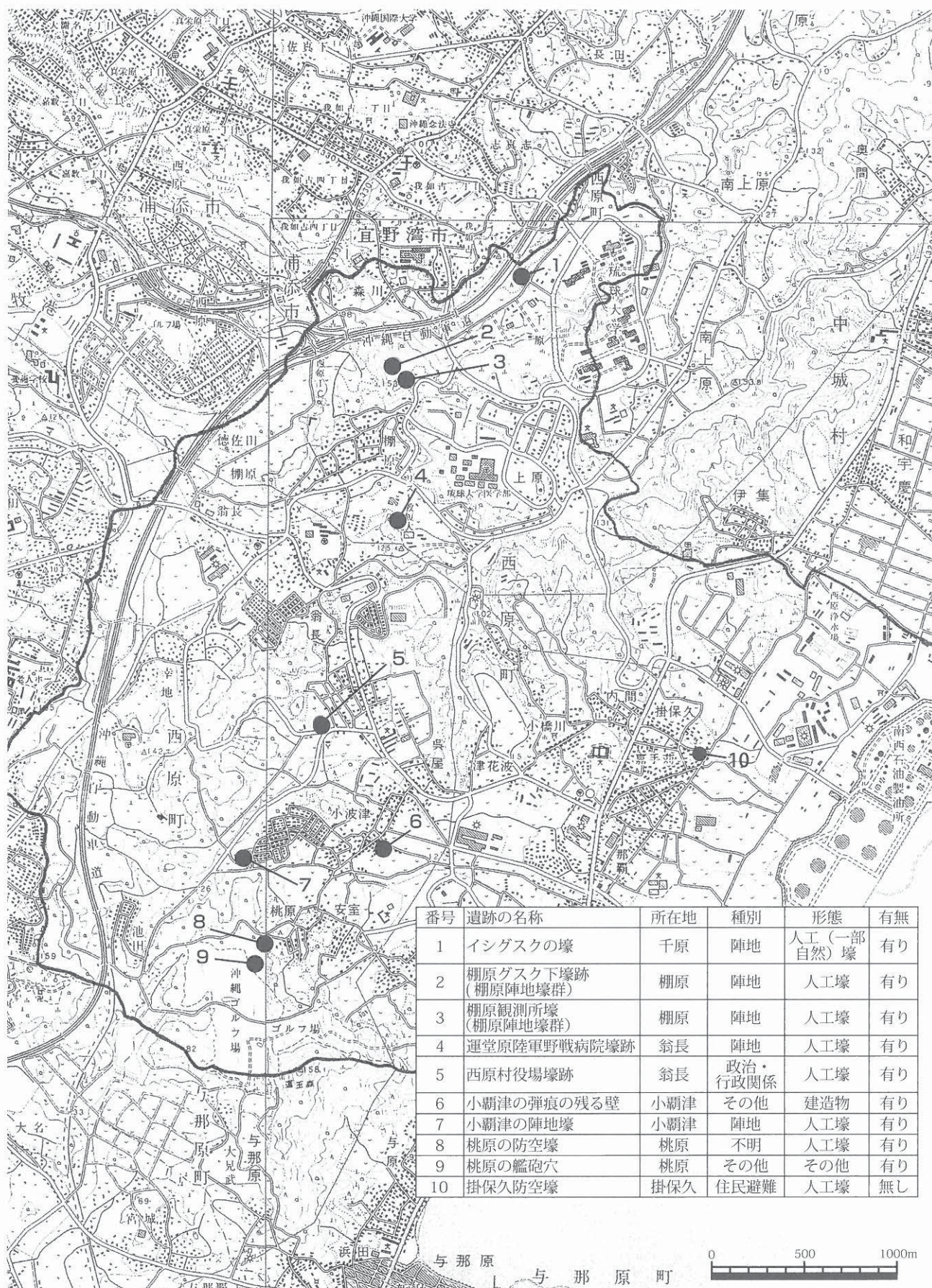
2) 西原町の戦争遺跡

沖縄県内でも西原町は「戦跡考古学」(當眞 1984)が提唱された1980年代から戦争遺跡の調査を行ってきたところである。字森川の「フニムイ」と称する丘の中腹に掘られていた森川陣地壕は旧日本軍の陣地壕で、地元住民からの聞き取り調査では、1944年(昭和19)8月頃から1945年(昭和20)1月にかけて第62師団(石部隊)の弾薬や食料を貯蔵する目的で近隣の住民を徴用して掘られたものである。この壕が沖縄自動車道の開通によって壊されることとなったため、町教育委員会では1985年(昭和60)2月に急遽調査を実施することとなった。壕は第3紀砂岩(ニービ)や第3紀泥岩(クチャ)を基盤とする標高127mのフニムイの中腹に、南斜面を開口部にして掘られている。全長は約38mで西原町内に所在する壕の中では比較的規模の大きな壕である。内部は不発弾が多いため発掘することを控え、専ら表面踏査によって床面に散乱している戦争遺物の位置を壕の平面図にプロットした。採集された遺物は発炎筒、不発弾、軍靴、空缶、茶碗類、手榴弾などであった。なお、戦死者の遺骨はなかった。

同年の9月には翁長に所在する西原村役場壕の発掘調査が行われた。役場壕はニービに掘りこまれ、ホール型をしており、全体が約40㎡の面積である。ホールの中央には1m角の2本の柱を残して掘られ、落盤防止にあてている。1980年頃土建業者によって道路に面した部分が抉られ大きく開口し、現在は棚と入口が設置されているが、ここは壕の最も奥の部分にあたるところである。壕内からは頭蓋骨の破片や砲弾の薬きょう、ジェラルミン製の水筒、飯ごう、鉄製のコップなどの遺物が出土した。2000年(平成12)、西原町が町制20周年記念に役場壕の保存・公開事業を実施し、案内板が設置された。

2000年(平成12)度には沖縄県立埋蔵文化財センターが調査主体となって行った沖縄県戦争遺跡詳細分布調査事業の本島中部地区の調査で、西原町は先述した西原村役場壕を含め9箇所の戦争遺跡が確認されている(沖縄県立埋蔵文化財センター2002)。西原町の戦争遺跡の特徴として、9箇所の内5箇所は旧日本軍関係の人工の陣地壕で、他の市町村で見られるような住民避難等で利用された自然のガマは戦争遺跡として報告されていない。西原町の地質はニービやクチャを主とした第3紀島尻層群が広く分布しており、琉球石灰岩の地盤がほとんど見られない地域である。沖縄戦時、西原町は旧日本軍関係の施設が集中して構築されていたが、戦後、宅地造成などの地形改変によって沖縄戦当時の防空壕や各種の施設が相当数破壊されたものと思われる。また、比較的軟らかいニービやクチャの岩盤に掘り込まれた壕は、戦時中は落盤等を防止するために坑木等で補強していたが、戦後は放置されて年月の経過とともに自然に落盤、埋没した壕も多数あるものと推測される。

今回報告する掛保久地区の防空壕のように、現在はその存在を知られることなく地下に埋もれていたものが、こうした形で発見されるような事が今後においても十分予想される。



第1図 西原町戦争遺跡分布図

（『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査（Ⅱ）－中部編－』から抜粋）

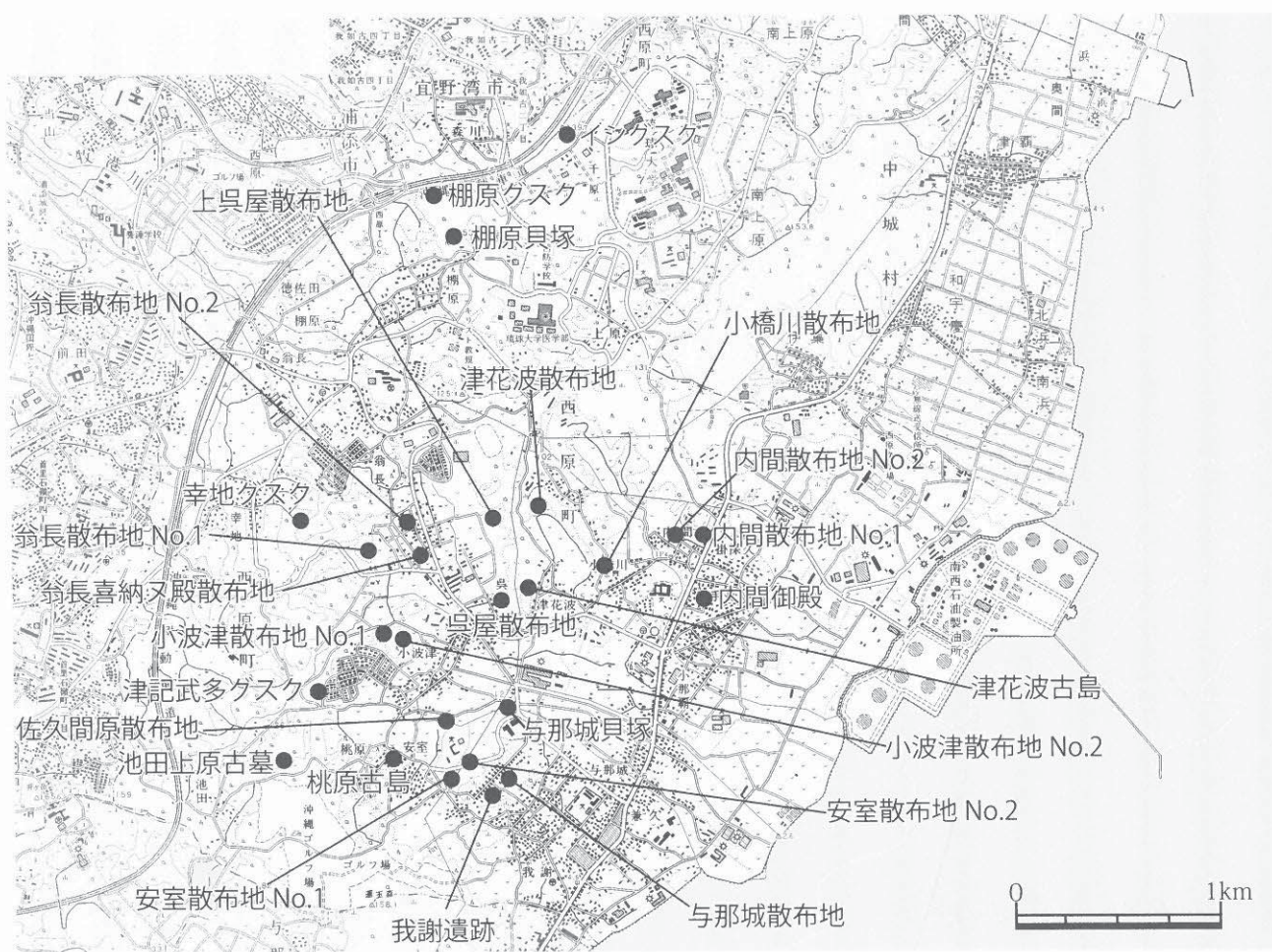




写真 1.
西原村役場壕跡入口



写真 2.
西原村役場壕跡内部状況

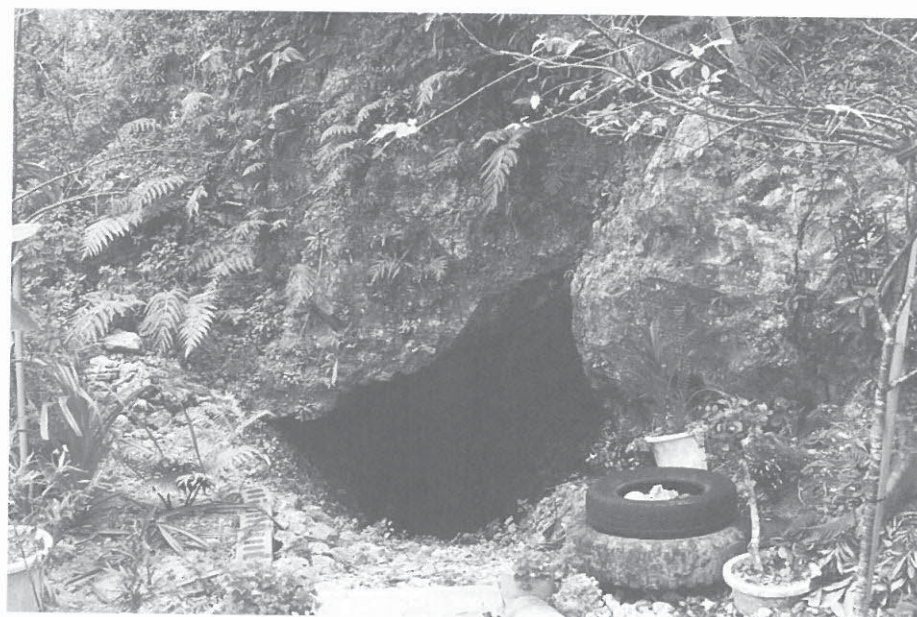


写真 3.
棚原陣地壕群跡入口



写真4.
小波津の陣地壕跡入口

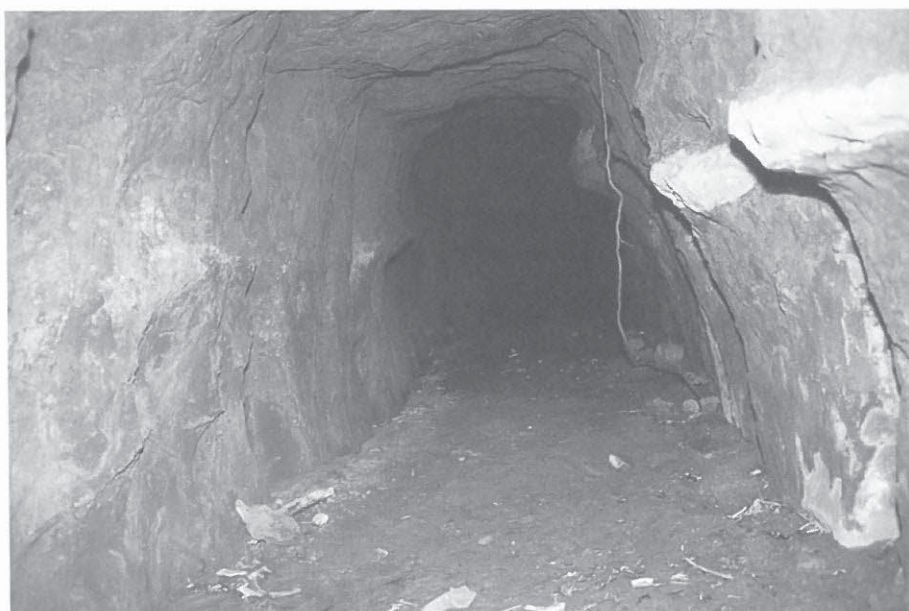


写真5.
小波津の陣地壕跡内部状況



写真6.
イシグスクの壕跡入口

5. 遺構

1) 立地と調査経過

当該の防空壕跡は下水道の配管工事で掘削した際に発見され、沖縄戦で使用されたと思われる防空壕である。防空壕が所在する一帯は現在、掛保久地区の住宅地域で、沖縄戦当時に比べると、地形が改変されている。壕の周辺は西側に掛保久地区の公民館、南西側に掛保久集落の御願所であるクシマーモー、北側の小高い丘陵地一帯には墓地群がある。

配管工事のため未舗装の小道を重機で掘削した際に壕の天井の一部が崩落した。発見時、崩落した箇所直下には大量の本土産近現代磁器が積み重ねられ、沖縄産無釉陶器（壺）、人骨も散乱していたという。しかし、協議を経て本格的な発掘調査を開始する前に、発見時に確認された遺物はすでに取り上げられていた。

2) 形態的特徴

壕は第3紀砂岩（ニービ）に掘り込まれており、平面形で「L」字状に構築している。崩落して壕内に進入出来る箇所はL字の角の部分にあたり、調査前に取り上げた遺物が出土した場所でもある。北向きの通路には奥壁が見られるため、東方向に壕の入口があると判断し、流入した土砂の除去を行った。東向きの通路は奥に進むにしたがって土砂の堆積が厚くなり、その奥一面には土砂が詰まっている事などから、通路の最奥部が壕本来の進入口であることは分かったが、これ以上掘削すると、土砂が崩落する危険性があったため、壕本来の入口の形状等を確認するまでには至らなかった。

内部は重機で掘削した際に崩落した進入口以外に崩落箇所はなく、保存状況としては極めて良好である。天井の形状はアーチ状で、丁寧に成形されている。比較的加工しやすい砂岩地帯に掘り込まれていることもあって、壁面には掘削痕が至るところに見られる。壕内部の計測値は東向きの通路が幅は0.7～1.0 m、高さは1.2～1.3 m、奥行は3.6 mを測り、北向きの通路は幅1.2 m、高さは1.3 m、奥行は2.7 mである。

3) 遺構内の様相

壕内部に流入した土砂を取り除くと、壕の中で使用していたと思われる当時の床面から遺物が検出された（第4図）。遺物は東向きの通路から主に出土し、特に通路の最奥部から西側約1 m以内にまとまって見られた。床面から検出された遺物は鉄製の鍋、本土産近現代磁器、沖縄産施釉陶器（壺）ガラス瓶、セルロイド製の歯ブラシ、硯等である。また、頭蓋骨の一部も確認し、発見時に確認された人骨も頭蓋骨の付近にまとまっていたとのことであった。通路の中央部には床板と思われる木製品が2箇所残存しており、床板の下部には幅約20 cmの溝が確認された。一方、北向きの通路には大型の鉄鍋（シンメーナービ等）が側壁に掛けられた状態で残存していた。

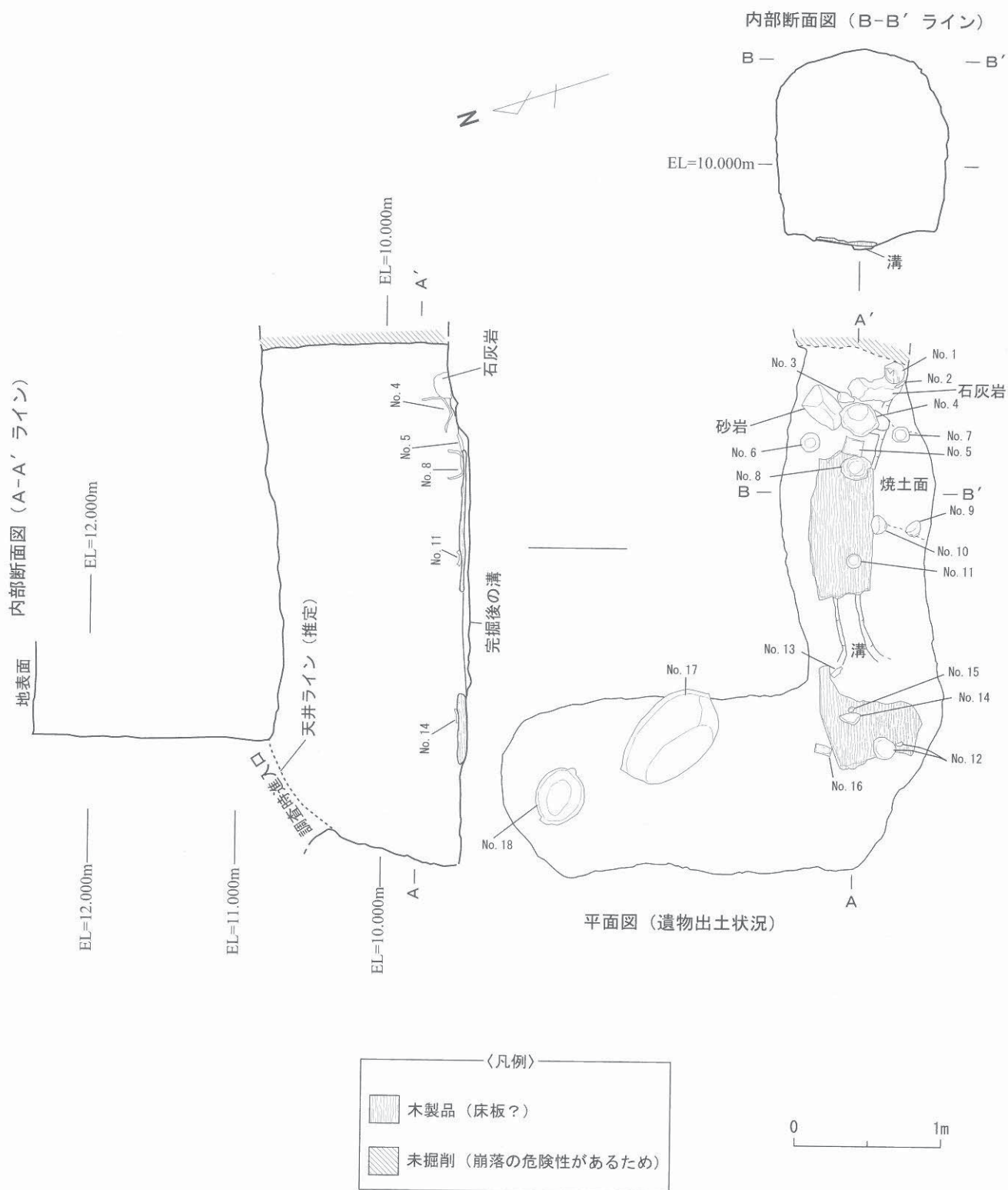
床面から出土した遺物を取り上げた後（但し、北向きの通路で出土した大型の鉄鍋は持ち出すことが出来ず、壕内に残した。）、完掘すると床板の下部から確認された溝は最奥部（入口側）で床面の右寄り（南側）に掘られ、一旦20 cm程堰を造っている。それからまた溝が再開し、内部に行くにしたがって中央部に移行しながら立ち消える。幅は約20 cm、深さは6～8 cmで推移し、入口から内部へ向け若干傾斜している。また、床面の一部では約60 cmの範囲で火を受けた痕跡が確認された。



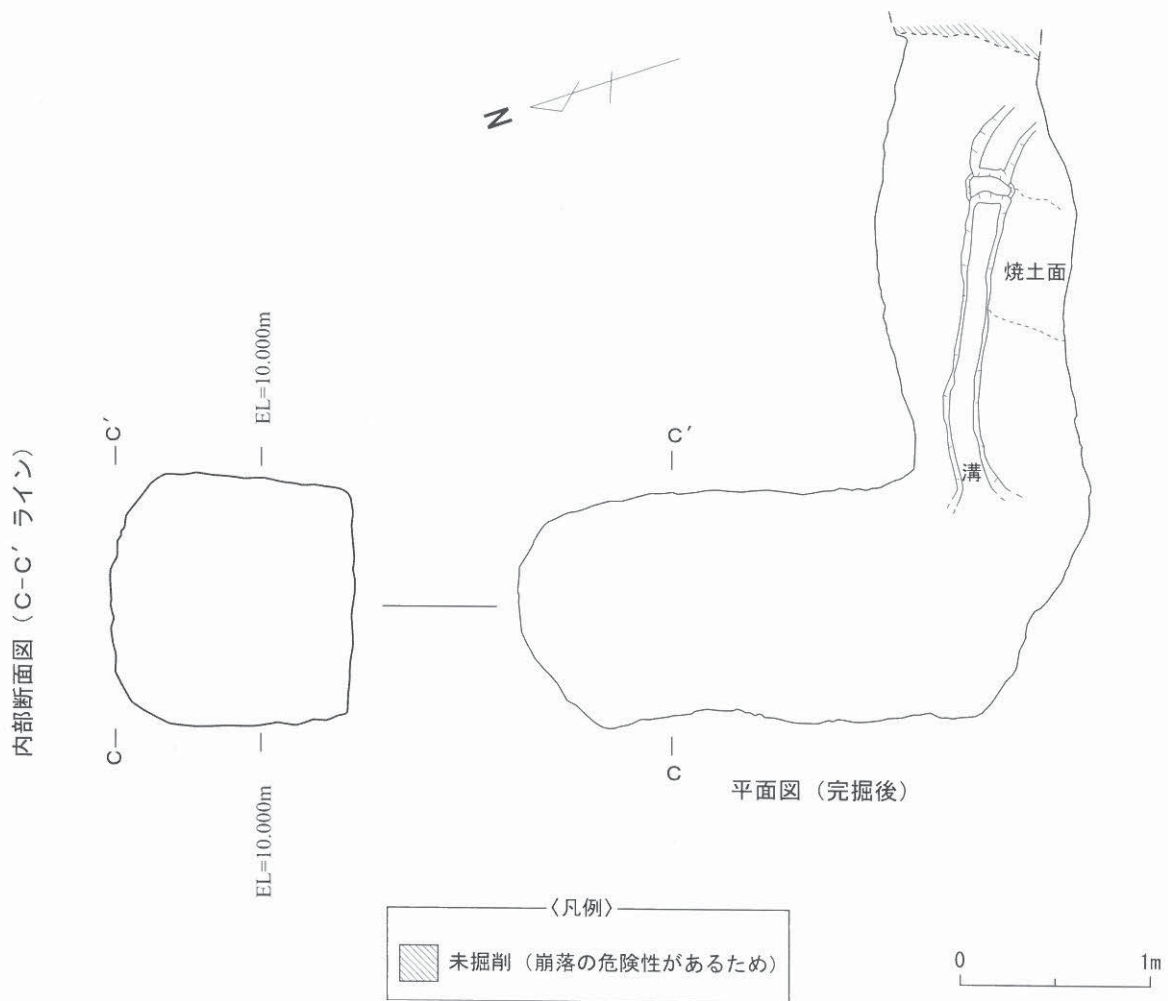
写真7. 掛保久防空壕遠景〔南より〕



写真8. 掛保久防空壕発見位置〔北より〕



第4図 掛保久防空壕実測図① (遺物出土状況)



第5図 掛保久防空壕実測図② (溝検出および完掘状況)

第1表 出土遺物一覧

No. 1	沖縄産施釉陶器 (小壺)
No. 2	沖縄産施釉陶器 (蓋)
No. 3	本土産近現代磁器 (瓶)
No. 4	鉄製品 (鍋)
No. 5	ガラス製品 (不明)
No. 6	染付 (碗)
No. 7	鉄製品 (不明)
No. 8	鉄製品 (鍋)
No. 9	本土産近現代磁器 (碗)

No.10	本土産近現代磁器 (碗)
No.11	本土産近現代磁器 (蓋)
No.12	人骨 (頭頂骨)
No.13	ガラス製品 (小瓶)
No.14	本土産近現代磁器 (碗)
No.15	本土産近現代磁器 (小杯)
No.16	石製品 (硯)
No.17	鉄製品 (鍋)
No.18	鉄製品 (鍋)



写真 9.
防空壕発見地点 [北東より]

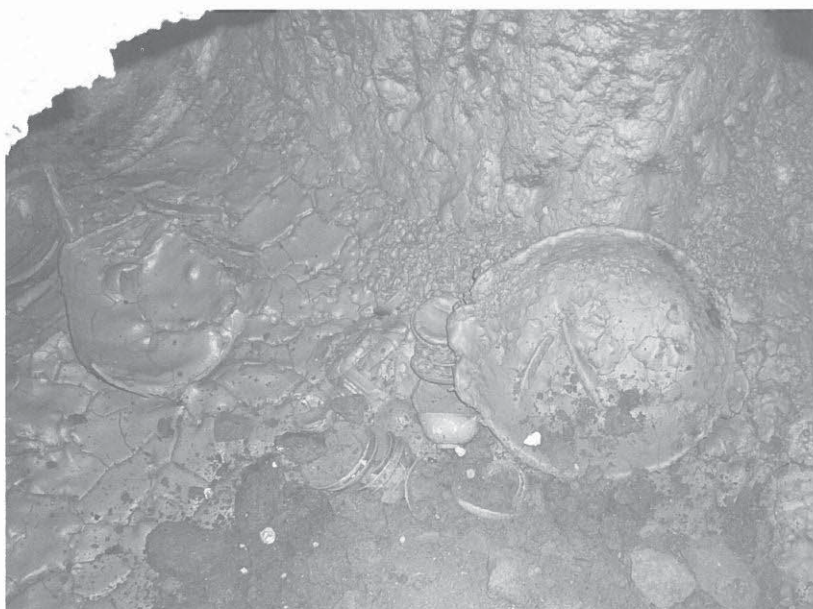


写真 10.
壕内調査前状況② [西より]

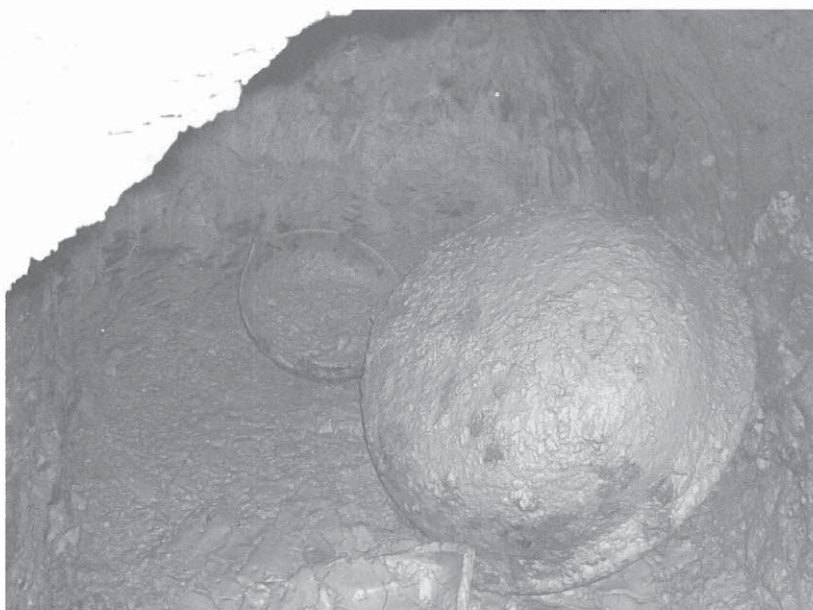


写真 11.
壕内調査前状況③ [南西より]

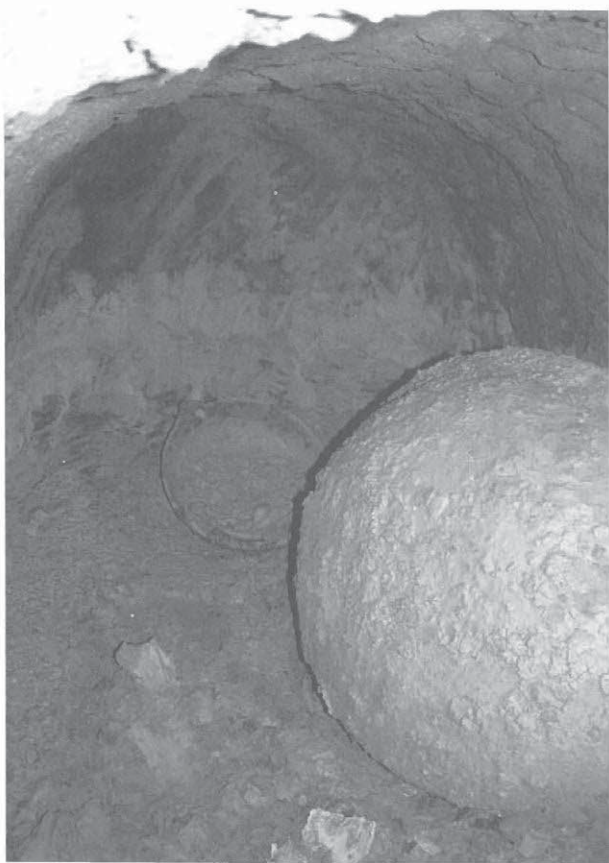


写真 12. 遺物検出状況① [南西より]



写真 13. 遺物検出状況② [北西より]

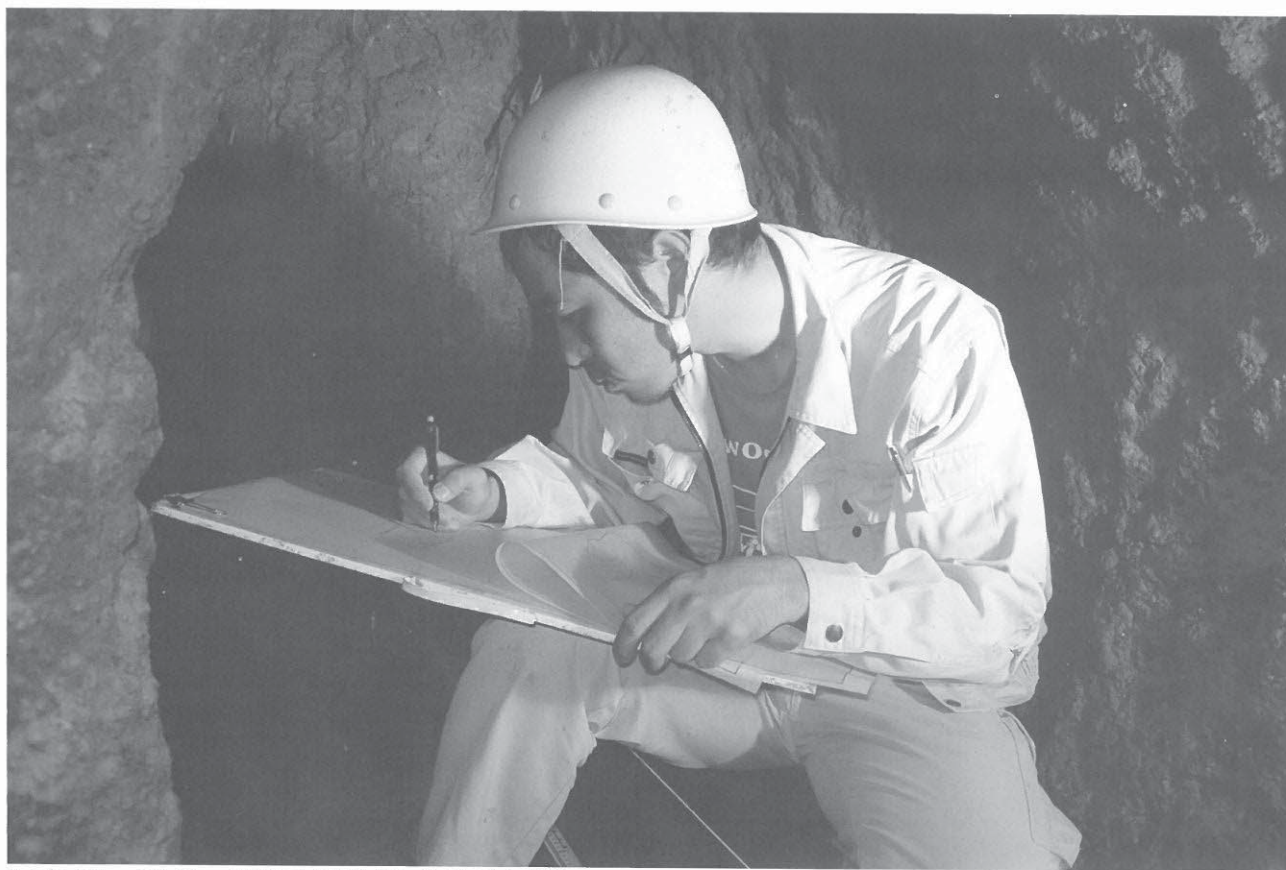


写真 14. 遺構・遺物実測作業 [北西より]

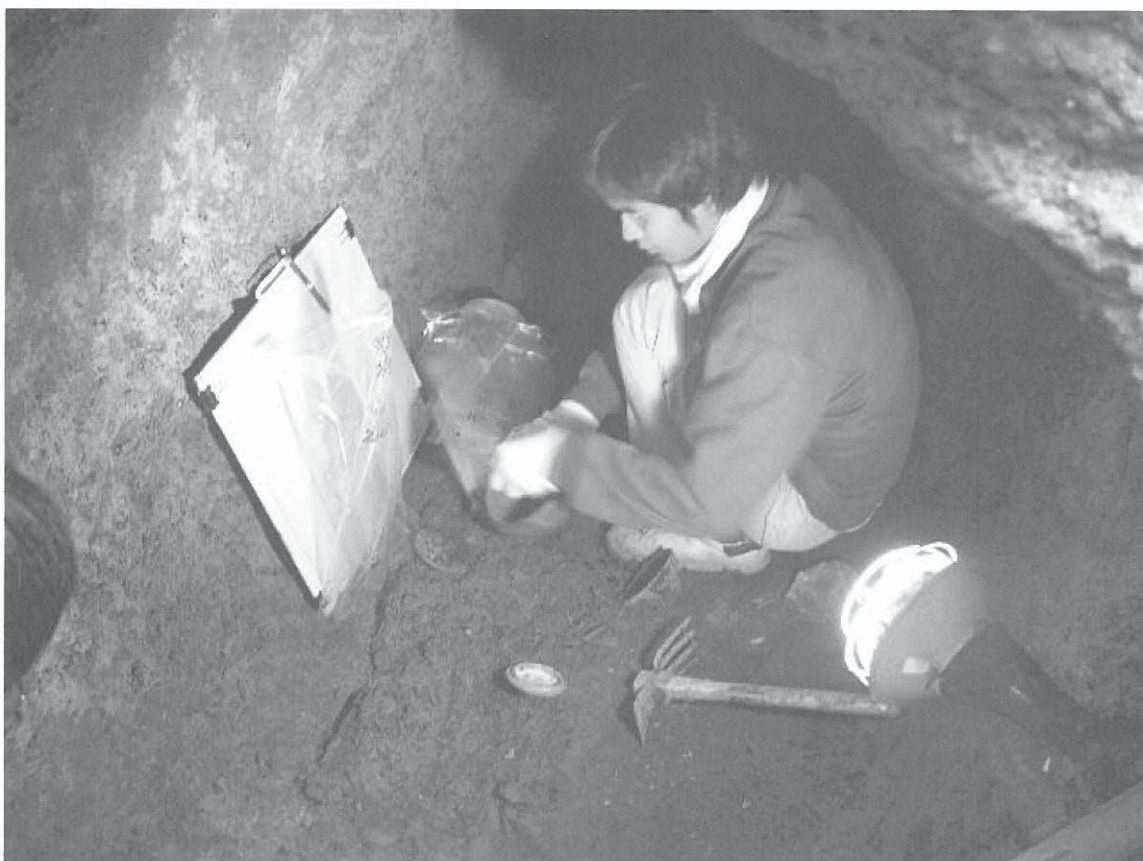


写真 15. 遺物取り上げ作業 [西より]



写真 16. 溝検出・完掘状況 [北西より]

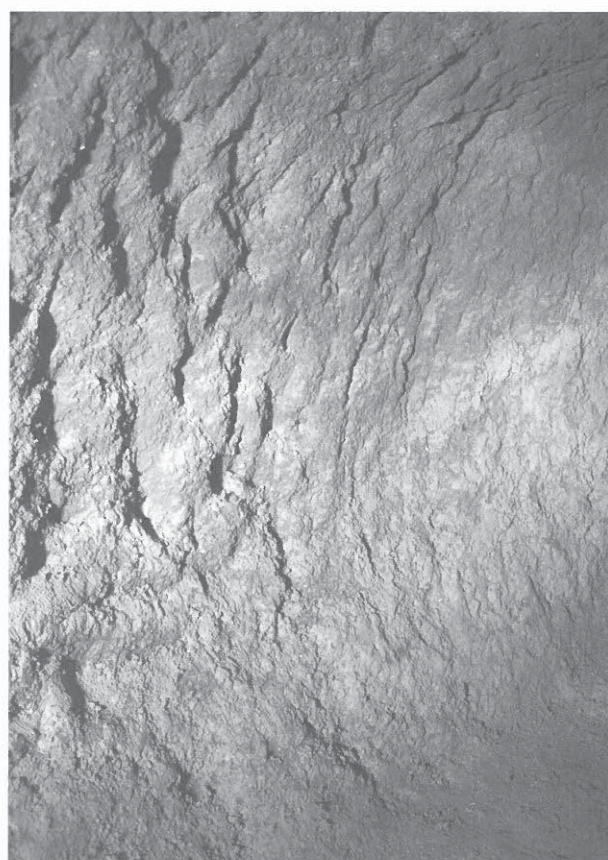


写真 17. 壁面掘削痕 [南西より]

6. 遺物

今回の調査で壕内から総数 83 点の遺物が得られた。遺物の種類は染付、沖縄産無釉陶器、沖縄産施釉陶器、本土産近現代磁器、鉄製品、瓦、石製品、ガラス製品、セルロイド（プラスチックの一種）製品。以下にそれぞれの特徴について記述する。

1) 染付（写真 18）

染付は総数 2 点出土した。二つとも同じ文様の碗で、18c ~ 19c の徳化窯系。高台が高く、高台径も大きい。腰部が丸みを帯び、口縁部が弱く外反する。外面胴部には寿字文と梅花文が、腰部には簡略した蓮弁文、見込みには不明文が描かれている。口縁部両面に一条、高台脇・見込みに二条ずつ圈線が入る。全体に青味を帯びた釉が掛かる。畳付は釉剥ぎ。左（図 No. 6）は口径 14.5 cm、器高 6.7 cm、底径 5.9 cm、右は口径 14.4 cm、器高 6.4 cm、底径 7.1 cm。

2) 沖縄産無釉陶器（写真 19 左）

沖縄産無釉陶器は壺が 1 点のみ出土。一部欠損しているが、口縁部から底部まであり、全体の形が窺える。外面の口縁部から肩部まで泥釉が掛かる。外面肩部に三条の圈線、その下に一条の圈線が入る。両面に轆轤痕が見られる。素地は赤褐色。口径 12.6 cm、器高 45.8 cm、底径 20.5 cm。

3) 沖縄産施釉陶器（写真 19 右）

沖縄産施釉陶器は、小壺（第 4 図 No. 1）・蓋（第 4 図 No. 2）の総数 2 点出土しており、これら二つで一組の資料と思われる。小壺は頸部から口縁部に向かってほぼ垂直に立ち上がる。外面胴部に二条の圈線が入る。外面の口縁部から高台脇まで黄褐色の釉が掛かり、口唇部と畳付は釉剥ぎされている。両面に細かい貫入が入る。口径 9.3 cm、器高 10.7 cm、底径 7.3 cm。蓋は黒褐色の釉が甲部のみに掛かり、縁端部は釉剥ぎ。甲部に二条の圈線が廻る。素地は橙色。縁径 10 cm、器高 2.6 cm。

4) 本土産近現代磁器（写真 20 ~ 22）

本土産近現代磁器は総数 57 点出土しており、遺構内から一番多く出土した遺物である。碗は 19 点出土しており、その内 7 点は型紙刷りの印判染付である。小碗は 6 点全て色絵である。皿は 13 点、小皿 15 点出土しているが、全て銅板転写の印判染付である。その他に瓶 1 点（No. 3）、クロム青磁の小杯 2 点（第 4 図 No.15）、白磁の蓋（第 4 図 No.11）が 1 点出土している。



(No.6)

0 10cm

写真 18. 染付



No.1

No. 2

写真 19. 沖縄産施釉・無釉陶器



写真 20. 本土産近現代磁器（碗）



写真 21. 本土産近現代磁器（皿）

5) 鉄製品 (写真 23)

鉄製品は鉄鍋 4 点、釘 1 点、不明製品 1 点 (第 4 図 No. 7) の総数 6 点が出土。鉄鍋の内 1 点 (第 4 図 No.17) は大きく、重量もあり、壕内から持ち出すことが困難なため写真と図面で記録したのみにとどめた。鉄鍋のもう 1 点 (第 4 図 No. 4) は取り上げた後に、粉々に破損したため、掲載しなかった。厚さの薄い鉄鍋 (第 4 図 No. 8) は全体に青い塗装がされている。釘 (未掲載) は丸釘が 1 点のみである。

6) 硯 (写真 24 右下)

石製の硯が 1 点 (第 4 図 No.16) のみ出土しており、一部欠けているが全体の形が窺える。墨で擦ったと思われる溝状の使用痕がある。長さ 11.7 cm、幅 6 cm、厚さ 1.5 cm、重さ 231.6g。

7) 瓦 (写真 24 右上)

瓦片が 7 点出土しており、全て平瓦で、凸面はナデ、凹面は布目痕が入る。素地は明褐色。

8) ガラス製品 (写真 24)

ガラス製の瓶が 5 点、板状製品が 1 点 (第 4 図 No.5) の総数 6 点出土。瓶は、飲料水用と思われる瓶が 3 点、薬品用と思われる瓶が 1 点、用途不明瓶が 1 点 (No.13)。

9) セルロイド製品 (写真 24 左下)

セルロイド製の歯ブラシが 1 点出土している。

7. 人骨 (写真 25)

今回の調査で、一体分 (全部位の骨は確認できず) の人骨が出土した。人骨は調査前に壕内からほとんど取り上げられていたため頭頂骨 (第 4 図 No.12) 以外の出土位置・状態は記録できなかったが、聞いた話によると、取り上げた人骨は、頭頂骨付近に集中していたとのこと。これらの骨を接合した後に、資料を琉球大学医学部の土肥直美氏に見てもらい、確認していただいたところ、この人骨の年齢は 60 歳以上の老年男性ということが確認できた。戦時中または戦後に、何らかの事情で亡くなった方と思われる。出土した人骨 (接合不可能な細かい骨片を除く) は写真 25 に載せた。



写真 22. 本土産近現代磁器（小碗・小杯・瓶・蓋）

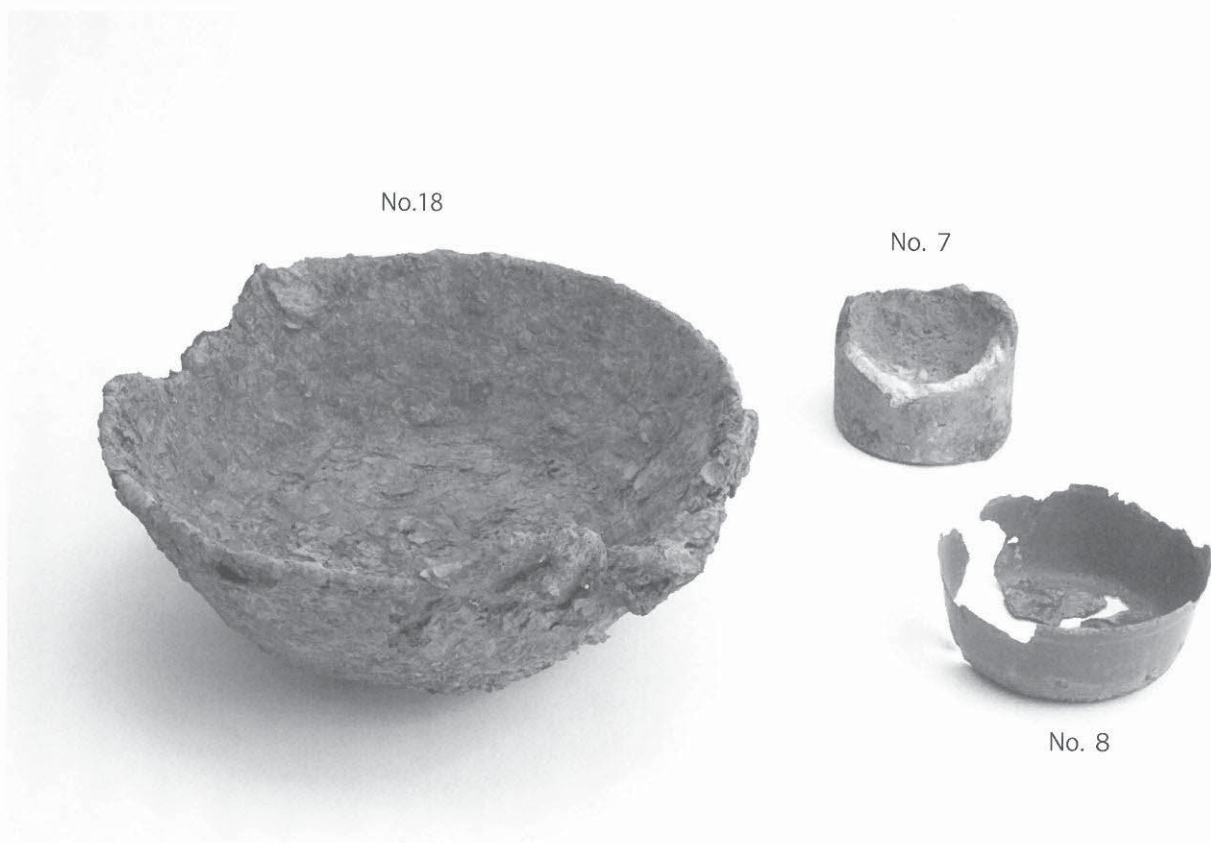


写真 23. 鉄製品（鍋・不明製品）

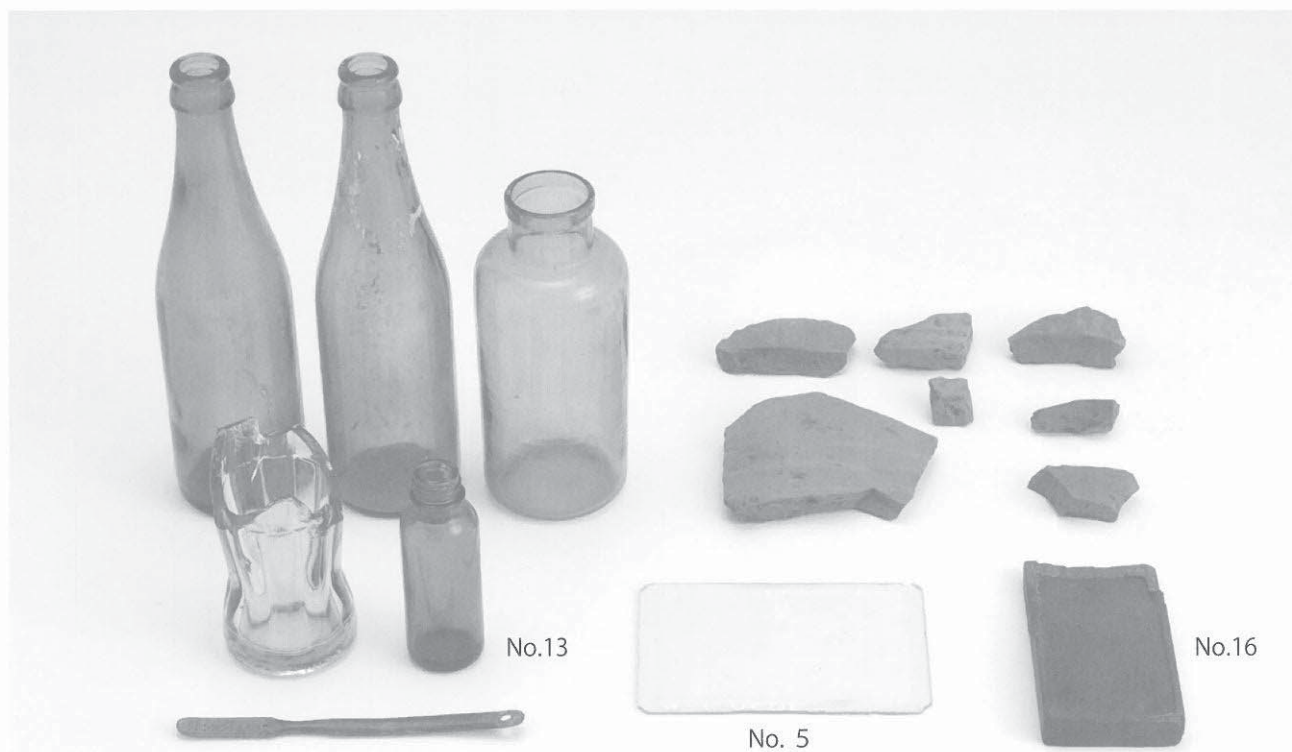


写真 24. 瓦・硯・ガラス製品・セルロイド製品

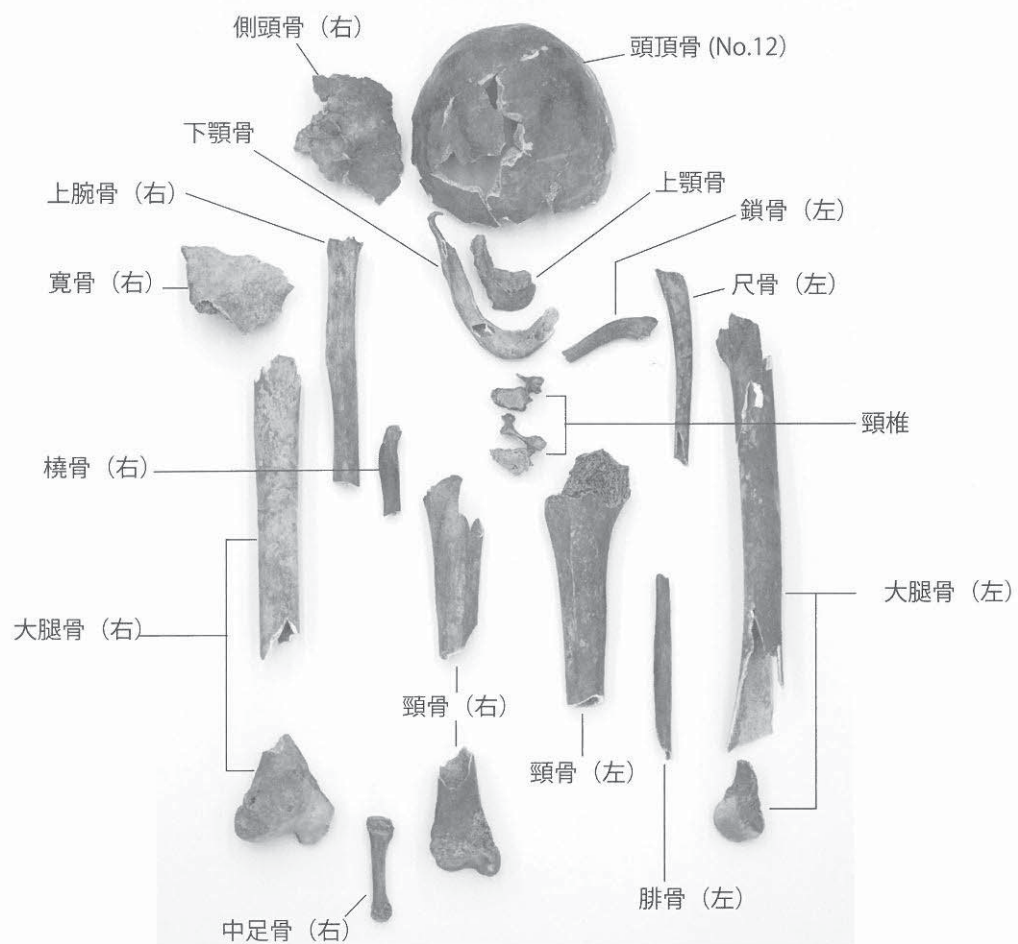


写真 25. 人骨

8. 聞き取り調査

今回調査した壕や戦時中の掛保久地区の状況についての聞き取り調査を行うため、掛保久地区の自治会長である玉那覇整氏を介して、戦前の掛保久について詳しい方を紹介していただいた。調査に協力していただいた方は掛保久在住の玉城善長氏（大正3年生）である。玉城氏は1945年（昭和20）1月に与那原に駐屯していた陸軍の特攻艇部隊に招集されるまで、掛保久に在住していた。

聞き取り調査は、掛保久公民館と、当該の壕が所在した場所にも同行していただき、戦前の掛保久の状況や、今回調査した壕について伺った。なお、以下の記述は玉城氏の証言を基に筆者が要約したものである。

1) 戦前の掛保久

玉城氏によると、戦前の掛保久には旧日本軍の駐屯地はなかったものの、集落内の何軒かの家は軍に供出されていたという。また、1944年（昭和19）5月から始まった沖縄東（西原）飛行場の建設で、建物の基礎の下に轆く補強のための石として利用するため、集落内の各家を仕切る石垣を接收されたとのことであった。

掛保久に住民の防空壕が構築され始めるようになったのは1944年の秋頃で、翌1945年の初めには各家に造られていたそうである。防空壕といっても、家の床下や庭の敷地内で地面を掘り込み、天井は板を敷いてその上に土や草を被せて擬装する簡易的なものであった。また、集落の避難壕も3箇所造られ、玉城氏自身も壕の構築作業に携わったという。避難壕は集落北側の丘陵の麓に5m程掘り込まれた天井のない塹壕のような形態であった。そして、米軍が上陸する直前の1945年の3月頃からは掛保久にも空襲や艦砲射撃が行われるようになり、住民は集落を離れ、村内の池田や本島北部へと避難し始めたとのことであった。

2) 今回調査した壕について

玉城氏によると、今回調査した壕のように横穴式に掘られた壕は集落内では他に見たことがないとのことで、当該壕の存在をご存知ではなかったが、壕が確認できた地点まで同行していただき、当時の状況をお聞きすると、戦前は当該壕周辺に南北方向に走る土手が形成されており、土手の東側斜面から掘り込まれた壕ではないかとのことであった。土手の東側には畑や井戸があったという。また、現地で記録した壕の実測図を見てもうと、避難した住民が爆風などを直撃しないようL字状に構築されているのではないかとおっしゃっていた。

次に、『西原町史 第3巻』『西原の戦時記録』から戦前の字掛保久住宅地図（第6図）を見ていただき、当時の土手があった位置を、大まかではあるが地図上に押さえることができた。当該壕の所有者については、同文献の字掛保久の世帯別戦争被災者状況一覧表（第2表）も参考に見ていただき、お聞きしたところ、当該壕周辺には何件か民家があることから、壕の所有者を具体的に特定することは出来ないが、壕周辺にある各民家の状況を伺うと、第6図②の玉城（屋号：東前門）さん老夫婦の避難壕である可能性が高いのではないかとのことであった。

その他に、壕に関する興味深い話として、戦前には民間で壕掘りを請け負う人たちがいたそうで、経済的に裕福な民家だとその人達を雇って防空壕を造らせていた話も聞いたことがあるという。丁寧に成形された当該壕は、人夫達を雇って造られた可能性は十分に考えられるとのことであった。

この話に付け加えて当時、東前門の玉城さんの家は比較的裕福で、しかも夫婦二人暮らしであったことから、当該壕は東前門の玉城さんが、人夫にお願いして造ってもらった壕ではないかともおっしゃっていた。

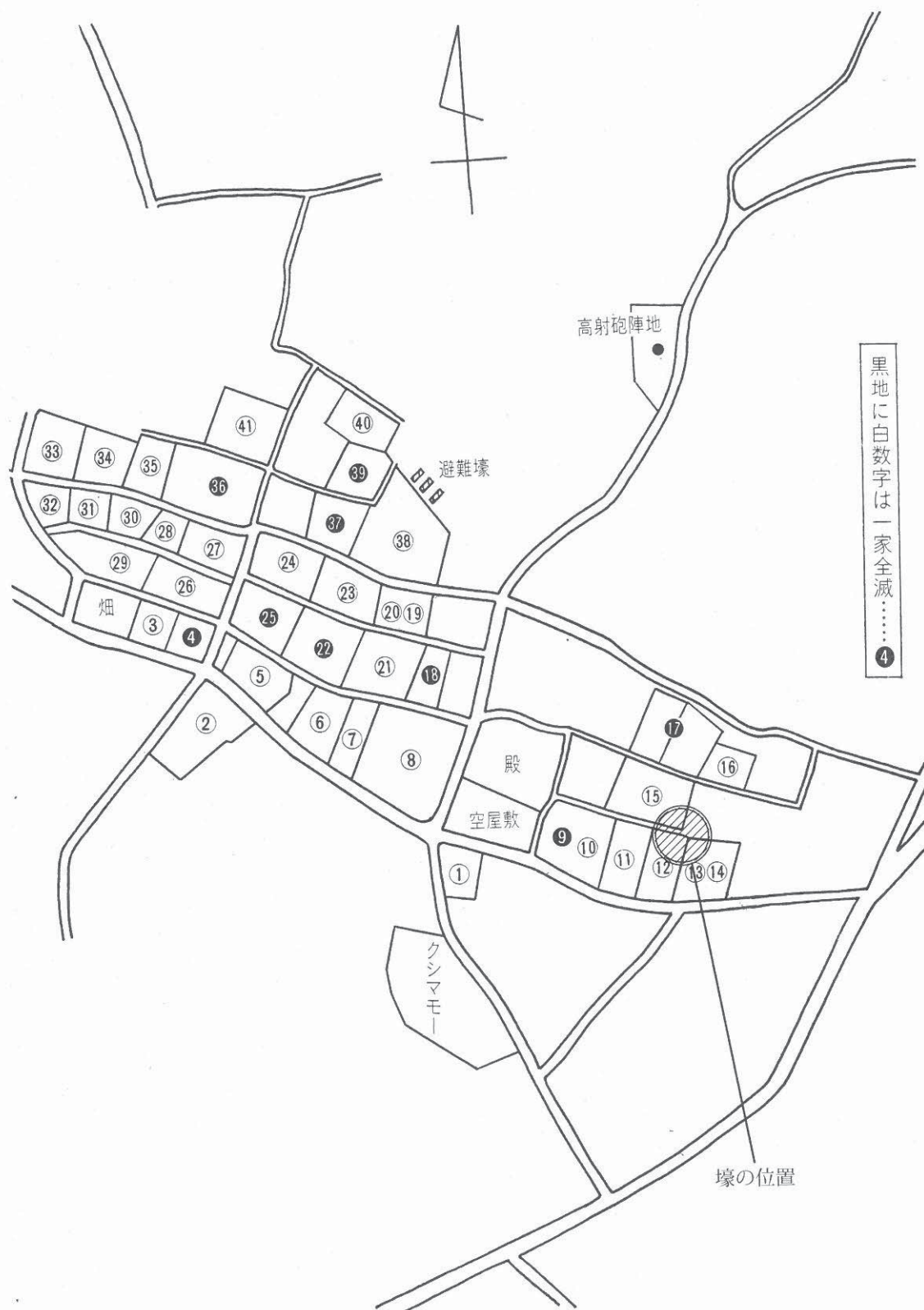
第2表 字掛保久の世帯別戦争被災者状況一覧表

(『西原町史 第三巻 資料編二 西原の戦時記録』から抜粋)

地図番号	屋 号	門 中	世帯人員			戦没者			備 考
			総数	男	女	総数	男	女	
1	仲前ン田 (ナーカメンター)	前ン田 (メンター)	0	0	0	0	0	0	・宮崎へ疎開 (S19.8)
2	新前小波津 (ミーメークファチ)	中城村和宇慶の出身	5	3	2	1	1	0	
3	前新屋敷 (ミーミーヤシチ)	玉城 (タマグスク)	6	4	2	3	2	1	
④	大城小 (ウフグスクグワー)	ウーニ	1	0	1	1	0	1	一家全滅
5	新前ン田 (ミーメンター)	前ン田	3	2	1	1	1	0	・大阪在
6	仲前ン田 (ナーカメンター)	前ン田	12	7	5	5	3	2	・父系は山原出身
7	前玉城 (メータマグスク)	玉城	2	1	1	0	0	0	・宮崎へ疎開 (3人)
8	玉城 (タマグスク)	玉城	7	4	3	2	1	1	
⑨	上城間 (イーグスクマ)	城間 (グスクマ)	1	0	1	1	0	1	一家全滅
10	城間 (グスクマ)	城間	2	0	2	0	0	0	
11	下ヌ前ン田 (シチャヌメンター)	前ン田							・南洋在 ・空屋敷
12	東前門 (アガリメジョウ)	玉城	2	1	1	0	0	0	
13	美里 (ンザトウ)	玉城							・サイパン島 (S14)
14	牛玉城 (ウシータマグスク)								・サイパン島 (大正末)
15	上ヌ前ン田 (イーヌメンター)	前ン由 (元家)							・空家
16	東リ前 (アガリメー)	玉城	3	0	3	2	0	2	・大正期に南洋へ
⑰	城間ヌ前 (グスクマヌメー)	城間	1	0	1	1	0	1	一家全滅
⑱	宮里 (ナーザトウ)		1	1	0	1	1	0	一家全滅 ・首里出身
19	世利ン田 (シリンター)	玉那覇 (小那覇) (タンナファ)	6	2	4	5	1	4	
20	世利ン田 (シリンター)								・空家
21	前門 (メジョウ)	城間	1	0	1	0	0	0	
⑳	新前門 (ミーメジョウ)		6	3	3	6	3	3	一家全滅
23	上ヌ前門 (イーヌメジョウ)	玉城	9	3	6	7	3	4	・南洋テニアンへ
24	仲前門 (ナーカメジョウ)	玉城	2	0	2	1	0	1	・アルゼンチンへ
㉑	新前ン田小 (ミーメンターグワー)	前ン田	6	2	4	6	2	4	一家全滅 ・当時ハワイ
26	新城間小 (ミーグスクマグワー)	城間	2	1	1	1	0	1	
27	仲前門小 (ナーカメジョウグワー)	玉城	3	1	2	1	1	0	
28	三男前世利 (サンナンメーシリー)	新川 (小那覇) (アラカー)	4	2	2	2	2	0	
29	城間小 (グスクマグワー)	城間	12	7	5	1	0	1	
30	玉那覇小 (タンナファグワー)	城間	5	2	3	1	1	0	
31	翁長前門 (ウナガメジョウ)	翁長前門 (ウナガメジョウ)	4	2	2	3	2	1	・ハワイへ (男1人女1人) ・佐世保へ (男1人)
32	三男城間小 (サンナングスクマグワー)	城間	3	1	2	0	0	0	・サイパン島 (男1人戦死)
33	与儀小 (ユージグワー)	城間	4	2	2	0	0	0	
34	次男前世利 (ジナンメーシリー)	新川 (小那覇)	6	5	1	2	2	0	
35									・サーターヤー
⑳	徳前門 (トウクメジョウ)	玉城	2	1	1	2	1	1	・ハワイへ 一家全滅
⑳	新屋敷小 (ミーヤシチグワー)	玉城	1	0	1	1	0	1	一家全滅 ・大正末頃サイパンへ
38	上前ン田 (イーメンター)	前ン田	11	5	6	4	2	2	
㉑	稲福小 (イナフクグワー)	大城 (内間) (ウフグスク)	2	1	1	2	1	1	一家全滅
40	上ヌ城間小 (イーヌグスクマグワー)								空屋敷 ・当時サイパン島
41	知念 (チニン)		2	1	1	0	0	0	・首里出身
	合 計		137	64	73	63	30	33	

総世帯数 35 戸
 総世帯人員 137 人
 総戦没者数 63 人 (46.0%)
 一家全滅世帯 9 戸 (25.7%)
 一人以上戦没者の出た世帯 27 戸 (77.1%)
 戦争孤児の出た世帯 1 戸 (2.9%)

※○の地図番号は一家全滅世帯



第6図 戦前の字掛保久住宅（屋号）地図
 (『西原町史 第三巻 資料編二 西原の戦時記録』から抜粋)



写真 26. 聞き取り調査（防空壕があった地点にて）〔西より〕



写真 27. 聞き取り調査（掛保久公民館内にて）

9. まとめ

今回調査した掛保久防空壕は西原町字掛保久 33 - 1 に所在する。下水道工事のための緊急発掘調査を西原町教育委員会が主体となって、沖縄県教育庁文化課と沖縄県立埋蔵文化財センターが協力して実施した。発掘調査は平成 17 年 11 月 15 日～11 月 18 日まで実施し、資料整理は平成 17・18 年度に沖縄県立埋蔵文化財センターにて実施した。

掛保久防空壕は下水道工事のためバックホウによって掘削中、大きな空洞が現れて、空洞内から磁器製の碗・皿、鉄鍋等の食器を中心とした遺物と人骨が出てきたことから確認できたものである。

防空壕の形態は L 字状の構造をしており、第 3 紀砂岩（ニービ）を基盤とする土手（聞き取り調査で確認）を横穴状に掘り込み形成したものである。防空壕本来の入口は大量の土砂により埋まっていて、崩落の危険性があるため、入口の形態を確認するまでには至らなかった。

壕内に流れ込んだ土砂を取り除くと、床面から、中国産染付、本土産近現代磁器、鉄製の鍋、石製品（硯）、ガラス製品（瓶・不明品）、セルロイド製品（歯ブラシ）が出土し、床板の一部と思われる木製品も確認することが出来た。

遺物を取り上げた後、床板の下部からは一条の溝が検出され、さらに、溝の周辺には火を受けた痕跡も確認された。壕内の造りは、天井や壁面が丁寧に成形されており、規模は横幅が狭く、奥行きは短いため、家族単位の避難壕と考えられる。

壕内は下水道工事の掘削で一部崩落した箇所を除き、保存状態が良好なことから、爆撃など戦争の被害を被っていない壕で、且つ、軍事関係の遺物が出土しないことから軍事に使用された痕跡は見られず、旧日本軍にも当該壕の存在を知られていなかったと考えられる。それに伴い、壕内で出土した遺物も発見時に取り上げたものも含め、住民の生活用品で占められる。また、遺構においても床板の下に掘られた溝などを見ると、構築時から形成されたものではなく、壕内で生活する中で必要に応じて加工していた可能性も感じさせる。戦時における住民の壕内での生活がある程度窺える状況を保っていたことは貴重な成果だと言える。その中で、老人男性の人骨が出土したことから、どういう経緯で亡くなったのかは明確でないものの、沖縄戦における一つの現実を思い知らされ、心が痛むものである。

また、今回の報告に伴った聞き取り調査でも重要な成果を得られた。当該の壕が構築された当時の地形、集落内で避難壕が構築される時期や米軍上陸直前に住民が掛保久から避難させられた等、戦前（昭和 19 年）から地上戦に突入する直前（昭和 20 年 3 月頃）までにおける掛保久の状況のある程度把握することが出来た。そして、当該の壕の所有者は具体的に特定することは出来なかったものの、戦前には民間で壕の掘削を請け負う人たちがいて、住民がその人夫を雇って防空壕を造らせていた等、戦時における住民避難壕に関する興味深い話を伺うことが出来た。

戦後、60 年以上経った現在においても聞き取り調査は、戦争遺跡の調査に関する有力な手掛かりとなることを認識することができ、その重要性を改めて痛感させられた。しかし、今後において聞き取りの対象者はさらに限られてくることは確実であり、聞き取り調査も時間との戦いになることは言うまでもない。

以上のことから、掛保久防空壕は、発掘調査、『西原町史 第 3 巻 西原の戦時記録』等の文献、聞き取り調査で得られた情報から総合すると、人骨の出土状況が不明瞭なこと等、いつ頃まで使用されていたかは明確には出来ないが、少なくとも地上戦開始（昭和 20 年 4 月）以前から使用されていた可能性は高い。遺構、遺物の出土状況を見ても、どちらかと言うと地上戦開始以前の生活状況が色濃く窺える、貴重な事例を示すことが出来たと言える。

今回の報告では、戦争遺跡の発掘調査、聞き取り調査を通して、沖縄戦の一つの実態を示すこととなっ

た。沖縄県教育委員会が行ってきた沖縄県戦争遺跡詳細分布調査事業（平成 17 年度を以って終了）により、具体的な調査成果と基礎資料の充実を図ることが出来た今日、県内の戦争遺跡を取り巻く状況は新たな局面を迎えつつある。現在も県内各地に見られる戦争遺跡にはそれぞれの遺跡固有の情報が内包されており、その中には未確認の情報も多く含まれていることが想定される。今後において戦争遺跡をより詳細に調査・検討をしていくためにはやはり考古学的な調査手法が軸になっていく（池田 2003）と思われるが、聞き取り調査等も可能性のある限り行っていく必要性は当然ながら有り、沖縄戦の更なる実態を掘り起こす努力を継続していくことが求められる。

資料整理にあたり、人骨調査では琉球大学医学部の土肥直美氏に御指導・御協力をいただいた。また、聞き取り調査においては、戦前時の証言者である玉城善長氏、掛保久地区自治会長である玉那覇整氏に御協力いただいた。そのほか、本報告作成にあたって沖縄県立埋蔵文化財センター調査課の方々にご尽力いただいた。記して感謝を申し上げる次第である。

（しまぶくろ ともゆき：西原町教育委員会）

（いは なおき：調査課 嘱託員）

（やまだ ひろひさ：調査課 嘱託員）

【引用・参考文献】

- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001 『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査（Ⅰ）－南部編－』 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 5 集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2002 『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査（Ⅱ）－中部編－』 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 12 集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2002 『首里城跡－継世門周辺地区発掘調査報告書－』 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 9 集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2006 『真珠道跡－首里城跡真珠道地区発掘調査報告書－』 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 32 集
- 西原町教育委員会・沖縄県立埋蔵文化財センター 2006 「池田上原古墓」『紀要 沖縄埋文研究』 4 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 當眞嗣一 1984 「戦争考古学のすすめ」『南島考古だより』 第 30 号 沖縄考古学会
- 西原町史編纂委員会 1987 「西原の戦時記録」『西原町史』 第 3 巻資料編 2 西原町役場
- 西原町史編纂委員会 1996 「西原の考古」『西原町史』 第 5 巻資料編 4 西原町役場
- 南風原町史編集委員会 1999 「南風原が語る沖縄戦」『南風原町史』 第 3 巻 戦争編ダイジェスト版（一部改訂）南風原町役場
- 大城将保 1999 「第 32 軍の沖縄配備と全島要塞化」『沖縄戦研究』 2 沖縄県教育委員会
- 南風原町教育委員会 2000 『南風原陸軍病院壕群Ⅰ』 南風原町文化財報告書第 3 集
- 池田榮史 2003 「特論 3 沖縄戦の遺跡」『沖縄県史』 各論編第 2 巻考古 沖縄県教育委員会
- 佐敷町教育委員会 2004 『平良川原遺跡 島宜原遺跡 役場壕』 佐敷町文化財調査報告書第 5 集
- 山本正昭・伊波直樹 2006 「沖縄県戦争遺跡詳細分布調査の成果と課題」『日本歴史』 第 703 号 吉川弘文館